

瀬田の唐橋

瀬田の唐橋は、大津の古くからのシンボルであり、7世紀に初めて架けられました。琵琶湖から大阪湾につながる瀬田川に架かる、この224mの橋は、京都と江戸（現在の東京）を結ぶ旧東海道の一部です。

元々の橋は現在の橋よりもさらに南にありました。16世紀に武将・織田信長（1534–1582年）が現在の場所に設置し、川の中洲で2つの橋をつなげた現在の形となりました。

この橋は、1868年まで日本の首都であった江戸から京都への主要ルートである東海道沿いにあります。この橋は、多くの有名な合戦が行われた場所でもあり、そこから「瀬田の唐橋を制する者は天下を制す」との言が生まれました。地元には、有力な藤原氏の武士が橋の上で巨大なムカデを倒したという言い伝えが残っています。川の東岸の橋の近くには、この武士の碑が置かれています。

橋の手すりにある緑色の玉ねぎ型の装飾は「擬宝珠」と呼ばれ、朝鮮や中国の伝統的な橋のデザインに基づいています。この様式の起源は、橋の名前にも反映されています。「kara（唐）」とは中国や朝鮮を意味し、「hashi」とは橋を意味します。

現在の橋は1979年に架けられたもので、現在でも大津の主要な幹線道路となっています。毎年行われる建部大社の船幸祭では、この橋が重要な役割を果たしており、神輿（持ち運びのできる神社）を乗せた祭礼船が橋の下を航行します。この間、この橋は通行止めとなり、船で運ばれている神々の上を何人たりとも歩くことはできません。

瀬田の唐橋は日本三名橋のひとつとされており、また、詩や芸術の題材となる、伝統に則って選ばれた近江国（現在の滋賀県）の景勝地「近江八景」のひとつでもあります。